

聖霊により一つとなる

創世記 11 章 1～9 節

使徒言行録 2 章 1～13 節

今日は聖霊降臨日、ペンテコステです。復活日の翌日から50日目に当たりその名がついています。旧約では7週祭と言われています。ユダヤの3大祭りの一つで小麦の収穫を祝ったものでもあります。1年の内で麦は秋播きと春播きがあります。秋に蒔いた麦は冬の低温期間を耐えて春から夏にかけて収穫となります。本来植物の発芽には低温期間が必要であったようで、もともと秋ごろ蒔いたものが冬の寒さを越えて春に発芽するらしいです。人間に似ていますね。麦に限らず、植物はそのような生理を持っているようです。梅や桜などを思い浮かべますね。でものちに変異して低温期間を経なくても発芽するような春播きのもので秋に収穫というものが出来たようです。人間も後に辛い期間がなくても芽が出るようになってくるのが増えたのかもしれない。レビ記には収穫した小麦をささげることが規定されています。それが新約になりますと聖霊降臨祭として、所謂教会の誕生日として祝われるようになりました。集って祈っていた信徒たちの上に聖霊が降って、様々な言葉で語られていたものがみんな理解できて一つになったということです。今日使われている言語は何千あるかわかりませんが、すでに死語となったものも含めれば相当な数になるでしょう。しかし聖書によればもともと言語は一つだったのです。これは最近の言語学とも見解が一致しているというのを聞いたことがあります。ではなぜ、いつごろからこのように多くの言葉ができたのでしょうか。先ほどお読みしました創世記にはバベルの塔の故事があります。私は何年か前に大阪にいた頃、中ノ島という所に美術館があり、そこでブリューゲルのバベルの塔の展覧会を見に行ったことがあります。外国から貸し出された有名な絵が東京に来てから、そのあと関西の地方に巡行するというケースがしばしばあるのを知りました。ブリューゲルは親子で画家であり二人とも何枚もバベルの塔を描いているので、お家芸とでもいえるでしょう。絵のあちこちの細部を見ると、色々な人が色々なことをしていて、当時の生活や技術などもわかり、見ていて飽きないものです。彼は16世紀の人ですから、その時代の技術や道具が使われているのが分かります。聖書では「石の代わりにレンガを、漆喰の代わりにアスファルトを用いた」と有りますからそれは当時の最先端の技術、ハイテクであったのです。今日でも科学技術が神格化され、神ならぬものが神をされて、本来崇められるべきものがないがしろにされて、人類の知識や知恵が偏重されてしまっている今日と通じるころがあります。ブリューゲルの描いたバベルの塔はねじれているというか螺旋状になって天に向かっていきます。円錐や円筒形のような安定した形ではない不安定な動的な形なのです。螺旋形には動的な方向性があります。人間のDNAも二重らせんで方向性がありますが生物としての動的さを感じます。自分の能力を誇り神様の領域である天にまで行こうとする奢りが伝わってきます。そして有名になろうとします。それは名を残そうとすることと同じでしょう。人間は死すべき存在でありますので、死んだ後も自分の痕跡を残したく切望するのです。それはある意味、神のような不死への憧れであり、存続の願いでしょう。人が神を拝まず自分の力を信奉して神のようになるという思いが表れているのです。バベルの塔の絵を見るとなんだかアリ塚のようにも見えますが、両者は根本的に違います。アリ塚は自然の必然性のものであります。アリが生きるために造ったものです。動物においてもアリたちのように協力して大きな塚を造ることがあります。動物は言葉がなくても協力して獲物をとることや、ある程度のものを作り出すことができます。人間も言葉を用いない程度のもものは協力して作れるかもしれませんが、高度な先端技術を用いるものには、例えば宇宙ロケットや飛行機など、多くの技術者が言葉を用いて意思疎通して作り上げなければなりません。もし言葉が通じなければ最先端の宇宙船は造れないでしょう。ブリューゲルの絵にもありますように、多くの人たちが最初意志疎通して協力できて造り上げていた塔は、アリ塚のように自然の必然として造られたものではありません。人間の自由な思いでもって造られたものなのです。しかしこの絵のように塔は未完成で終わっています。なぜなら人間のおごりをご覧になった神さまが、これはいけない、作業を中止させなければと思われたからです。神さまがどのようにしてこの塔を中止させたかと言うと、禁止命令を出されたわけでないのです。人間が使っていた言葉をバラバラにし意思疎通

ができないようにして、自ずから存続不可能であるということを思い知らせたのです。このようにして世界には多くの言語が存在するようになったのです。

ところが人間の罪によってバラバラになった言葉が、聖霊によって理解可能となったのが、今日の聖霊降臨の出来事です。人は言葉を発する時に空気を出します。神のよって霊を注入された人間が、霊と共に言葉を発するのです。キリストが昇天されてからも信徒たちは集まって心一つにして祈っていました。そこに聖霊が降り、それぞれの地方から来た人たちが、彼らのめいめいの故郷の言葉話しているガリラヤ人に驚くのです。それは神様の偉大な業をほめたたえていることでした。このような現象を見て驚き畏れる人たちもいましたが、一方「新しい酒に酔っているのだ」と嘲笑する人たちもいました。ここで「新しい酒」について考えてみたいと思います。勿論これはぶどう酒のことですが、ぶどうの収穫時期は7～9月です。ペンテコステは5～6月ですので少し早い感じがしますが、早めに収穫したのかもかもしれません。それも十分発酵する前のものなら「新しい」といえるでしょう。でもここで「新しい酒」(グルコース)は「甘い酒」(ブドウ糖)とも読めるのです。実際十分発酵していないぶどう酒は、アルコールに転換されていない糖分が多くあるので甘いと言えるかもしれません。とにかく神さまの偉大な業が語られて、教会が誕生しているのをやはり理解できずに嘲る者はいたのです。教会はそのようなこの世との戦いの中で福音を伝え、信仰を守りぬいていかなければならなかったのです。そして実際守り抜いた今日に至っているのです。

教会ができたということは、それまで人間の罪によってお互いの心が心底通じ合えなかった者同士が、神様の御業を讃えるということで心が一致して通じ合えるようになったということでもあるでしょう。今日のわたしどもにおいてもお互いに心の通じ合わないこともあることでしょう。しかし共に一つの神様を見上げて心を合わせ祈る時に、上からの聖霊が降り、通じ合うことができるのです。

教会はキリストを頭とする一つの体です。私どもは聖霊によって一つの体となっているのです。聖霊の力がなければ私どもはたやすくキリストから離れてしまいバラバラになってしまうことでしょう。それではバベルの塔を築こうとした罪の状態に戻ってしまいます。私どもは自分の内の弱さを知っています。それに打ち勝つ強さも自分にはないことも承知しています。だからこそそれぞれの弱い一人一人を、神様は聖霊をお遣わしくさってキリストにつなげてくださるのです。火のような聖霊によってできた教会は今目に見えない聖霊に導かれ助けられて今なおこの世に存続しています。今わたしどもがなすべきことは、聖霊よ、来てください、私どもを強めてくださいと祈り願うことです。そのように皆が心一つにして祈っているところに、2000年前のペンテコステの出来事が再現されることでしょう。